



日本SPF豚協会だより

2020. 4
No. 79

提 言

「豚熱」の撲滅を目標に掲げて

(株)アニマル・メディア社 月刊ピッグジャーナル編集部

岩田寛史



新型コロナの感染拡大に既視感を感じた人が養豚関係者のなかに少なくなかったのではないだろうか。今まで見てきた“豚コレラ再興”の悪夢の映像が、まだ終わらないうちに最初から再生されているかのように思えてならない。

この1年間、教えを乞うてきた清水悠紀臣先生から最近いただいたお便りの最後に、「人のコロナも連日の報道で食傷気味ですが、こんな重大な疾病対策ができない国に成り下がったのかという感ひとしおです。官僚がやる仕事には限界があることを、そろそろ知ることが必要でしょう」との忠告があった。まさにそのとおりだと思うが、では、そのことを前提に、どうすればよいのか？ 官僚も人間がつくったシステムであり、研究者も養豚生産者も同じ人間の弱点を備えている。そこで、誰が良い悪いのと議論しても、大きな視野で見ればそれは皆が天に唾しているようなものだろう。

「豚コレラ撲滅」の運動が生産者のなかから起こり、行政がそれを受け止めて撲滅プログラムが立ち上がる場面をつぶさに見てきた。SPF研究の黎明期に家衛試のSPF研究班に名を連ねたお1人でもある熊谷哲夫先生に毎月、山下哲生氏が主催した有志の勉強会の講師を務めていただき、「日本で豚コレラを撲滅できない理由は何もない」との言葉に背中を押される思いで撲滅推進の旗を振った。平成8年度に豚コレラ撲滅事業が立ち上がったあと、ワクチン中止に対して生産者のなかから反発が生じると、「既に国内にウイルスはいない。海外から侵入するリスクは、清浄国からしか豚肉を輸入していないから極めて少なく、万が一侵入しても緊急ワクチンを備蓄しているからまん延することはない…」と反論し続けた。そのときの判断自体は間違いでなかったと信じる反面、自分の発信してきた誌面に対する責任のとり方が足りなかったのではないかと悔いる気持ちに襲われる。この間には2度、

口蹄疫の侵入まで許していながら…。

何が足りなかったのか？ ①安心材料のままやり過ぎてきた備蓄ワクチンの使い方の追求、②汚染国からの渡航者急増の実態把握と注意喚起、③インバウンドの政策推進にリスク管理が追いついていないことへの批判、④アジアで発生が続く豚コレラという病気そのものへの関心、⑤海外で開発されていたマーカーワクチンの情報収集、などいくらでもあげられるが、最も怠った仕事は、農場の防疫水準を上げるための情報発信、意識づけだったと思う。

伝染病の侵入・まん延防止は、行政だけでできることではない。産官学、研究者や獣医師、そして最大の受益者である生産者と周辺業界、各プレイヤーが少しずつ背伸びをし、そして横に手を伸ばして連携を強めることで、防壁は高く強固になる。例えば、研究部門の獣医師と臨床の獣医師が互いのテリトリーの周縁部を少しずつ広げて連携する。柏崎守先生がアジア養豚獣医学会(APVS)の大会長を務めたあと、そこで官民様々な立場の獣医師が連携した成果を将来につなごうと豚病3団体の合同研究集会を立ち上げた。それから10年になるが、先生の教えを最も身近に受け、官民獣医師の連携の下で半世紀にわたり病気がない養豚を目指し続けてきた日本SPF豚協会にしか果たせない役割があると思う。研究の成果を産業に応用してきた経験とネットワークを、SPF養豚が確立してきたバイオセキュリティがすべての養豚生産者に求められている今だからこそ、“外”に向かって解き放っていただきたい。

筆者は、上述の反省の下、熊谷先生や清水先生に見届けていただくことはできないかもしれないが、今度は「豚熱」の撲滅をしたたかに狙いながら、もち場の役目を果たしていきたい。

SPF豚農場と飼養頭数の分布 (2020年3月現在)

表1 認定農場の分布

飼養規模(頭)	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	飼養母豚数
99以下	2	0	5	0	0	1	1	9	516
100～299	4	6	20	3	0	1	5	39	7,084
300～599	4	7	8	3	0	8	7	37	15,621
600～999	1	9	5	1	2	2	11	31	24,821
1,000以上	2	8	3	0	0	1	7	21	27,491
計	13	30	41	7	2	13	31	137	75,533
子豚育成・肥育専門	2	2	13	1	1	4	19	42	
合計	15	32	54	8	3	17	50	179	
飼養母豚総頭数	6,597	21,355	14,997	2,502	729	6,797	22,556	75,533	

表2 認定農場および飼養母豚数の推移

年度	2015		2016		2017		2018		2019	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	14	4,903	14	4,942	13	4,439	13	5,618	13	6,597
東北	31	25,975	32	25,901	32	25,735	33	25,888	30	21,355
関東	42	14,546	43	14,779	42	14,594	42	14,974	41	14,997
北信越	9	3,421	9	3,417	8	3,140	8	2,885	7	2,502
近畿東海	1	0	1	0	2	682	2	720	2	729
中四国	14	7,630	14	7,615	14	6,898	15	7,111	13	6,797
九州	32	23,943	30	22,755	30	22,116	30	22,460	31	22,556
子豚育成・肥育専門	35		35		43		47		42	
全国	178	80,418	178	79,409	184	77,604	190	79,656	179	75,533

例年同様、やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め、頭数は含めない。認定農場数にはGGP・GP 20農場および子豚育成・肉豚肥育専門農場を含む。東北地域の大型グループ農場の退会、および大規模農場の認定休止により戸数・頭数とも減少したが、一方で新規農場や規模拡大した農場も複数ある。地域的には北海道地域の増頭が目立つ。全国の飼養母豚数85.3万頭(平成31年2月現在、畜産統計)に占める認定SPF豚の割合は8.9%であった。

CM認定農場の生産成績 (2019年度)

表1 一貫生産農場

	件数	母豚数	生産指数	農場回転数		農場飼料要求率		出荷頭数 / 母豚		A 薬品費 / 肉豚	
	101	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	26	418	122.83	1.95	17.18	2.97	26.70	24.33	45.58	95	33.36
B	25	636	108.77	1.83	16.13	3.12	25.56	23.47	43.98	242	23.10
C	25	520	100.13	1.73	15.24	3.19	25.02	21.99	41.20	305	18.37
D	25	502	91.12	1.65	14.58	3.29	24.19	20.02	37.50	360	14.84
最高成績		975	136.81	2.06	18.15	2.81	27.96	27.70	51.90	17	38.80
最低成績		609	83.18	1.54	13.55	3.26	24.41	16.86	31.59	377	13.63
平均値		518	105.88	1.79	15.80	3.14	25.38	22.47	42.10	249	22.52

表2 繁殖専門農場-II (分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場)

	件数	母豚数	生産指数	分娩回数 / 年		離乳頭数 / 母豚		出荷子豚数 / 母豚		A 薬品費 / 子豚	
	11	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,253	123.80	2.45	21.27	26.09	23.16	25.08	46.81	59	32.56
B	3	904	111.97	2.40	20.82	25.69	22.81	24.42	45.59	138	22.75
C	3	873	101.96	2.18	18.99	22.90	20.33	20.68	38.61	128	24.04
D	2	897	96.11	2.36	20.52	23.71	21.05	23.28	43.45	231	11.10
最高成績		1,244	127.93	2.41	20.98	25.22	22.39	24.97	46.60	16	37.96
最低成績		913	95.41	2.30	19.99	22.75	20.20	23.31	43.51	226	11.71
平均値		990	109.58	2.35	20.39	24.68	21.91	23.37	43.63	131	23.66

表3 肥育専門農場-II (繁殖専門農場-IIまたは子豚育成農場から子豚を導入し、肥育している農場)

	件数	出荷頭数	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A 薬品費 / 肉豚	
	14	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	4	4,491	108.69	2.89	61.87	97.45	24.53	112	22.29
B	4	10,109	98.45	3.43	52.88	97.31	23.12	111	22.46
C	3	11,718	93.56	3.40	53.32	97.32	23.17	144	17.07
D	3	7,734	84.47	3.55	50.87	97.08	20.81	171	12.79
最高成績		13,595	110.36	3.30	55.02	98.61	36.14	131	19.20
最低成績		4,357	81.90	3.67	48.82	97.14	21.39	178	11.69
平均値		8,340	97.33	3.29	55.11	97.30	23.04	131	19.18

表4 肉豚または子豚1頭あたりA薬品費使用

一貫経営

薬品費 / 肉豚	農場数	平均金額
100 円未満	16	34
100 円～ 199 円	24	161
200 円～ 299 円	16	245
300 円～ 399 円	32	355
400 円～ 450 円	13	419
平均		
最高		6
最低		432
上位 25%の平均		95

繁殖専門農場 (繁殖-II)

薬品費 / 子豚	農場数	平均金額
100 円未満	3	32
100 円～ 199 円	5	128
200 円～ 250 円	3	234
平均		
最高		16
最低		240
上位 25%の平均		59

肥育専門農場 (肥育-II)

薬品費 / 肉豚	農場数	平均金額
100 円未満	2	57
100 円～ 200 円	12	143
平均		
最高		30
最低		197
上位 25%の平均		112

SPF豚の飼養管理において、CSFを始めとして有害な細菌・ウイルスなどの微生物を殺す＝消毒は基本中の基本です。しかしながら、養豚場の内外には有機物がたくさん存在しており、それらの有機物により消毒薬の効果が減弱して、農場ストックマンの努力が水泡しているケースが多々あると思っています。↗

↘このような農場の消毒作業を無駄にしないために、全農グループでは過酢酸製剤「ビネパワー（15%過酢酸製剤）販売元（㈱科学飼料研究所）」を普及中です。過酢酸は、表のとおり各種微生物に対して優れた消毒効果があり、なおかつ毒性が低く、人体への安全性が高い消毒薬です。

表 各種消毒薬の各種微生物に対する消毒効果（中央畜産会）

消毒薬	細菌	抗酸菌	ウイルス	芽胞菌	酵母	カビ	毒性
塩素系	++	++	++	++	++	++	中程度
ホルマリン	+	+	+	+	+	+	高い
フェノール	+	+	±	-	+	+	高い
過酢酸	++	++	++	++	++	+	低い
逆性石鹼	±	-	±	-	++	+	低い
過酸化水素	++	+	+	±	+	+	低い
ヨウ素剤	++	++	++	+	+	+	中程度
水酸化Na	+	+	+	+	+	+	高い

++即殺菌、+殺菌、±ある程度殺菌、-効果なし

欧米では畜産業界でもポピュラーな消毒薬ですが、日本では認知度が低く、相対的な価格が高いため、消毒に対する効果を追求する医薬品業界での使用は非常に進んでいます。食品・畜産業界での普及はまだまだ道半ばの状況です。

また、普及が進まない要因の一つとしてビネパワー原液が強酸性(pH1~1.5)であるため、使用濃度の250ppmに希釈してもpH3.5と酸性が維持され、消毒効果は高いものの、噴霧機の腐蝕が起り、機械故障を危惧されていることが挙げられます。

このため、当社では過酢酸が触れる部材にすべてステンレスを使った動力噴霧機「オルサスシリーズ(背負型、据置型)」を開発しました(4月～販売予定)。価格は現在市販の動力噴霧機の約3倍と高額にはなりますが、腐蝕による故障がない機械として、安心してお使いいただけるものと考えています。そして、この動力噴霧機と過酢酸の日常使用により、SPF豚農場がより防疫レベルを向上させ、生産性向上が図られることを期待しています。

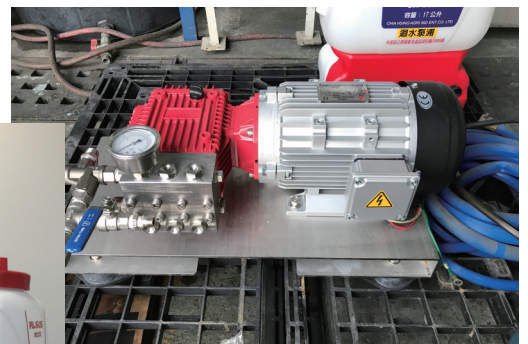
新連載

農場バイオセキュリティ強化のための最新情報



より効果的な消毒のために

全農畜産サービス株式会社
種田貴至



※豚舎内の設備を長持ちさせるためには消毒後の水洗をおすすめします。
オルサスライト(背負型)
オルサス KL25(据置型)
問合せ先：全農畜産サービス株式会社
TEL03-5245-4874
(担当 関谷)

トピックス

1

千葉県の認定農場の子ども食堂への協力、台風乗り越え継続中

協会だよりで何度かご紹介しております、千葉県内認定農場の千葉縣市川市「市川子ども食堂ネットワーク」への豚肉提供は、2016年11月の開始から今年2月までに32回を数え、この間にのべ1,250名の方にSPFポークを味わっていただくことができました。

同ネットワークは新たな拠点も増え、地域において欠かせない存在になってきているようです。

2019年度は9月、10月に相次いだ台風の影響で、認定農場や卵の提供でご協力いただいていた日本農産工業の関連会社・房総ファームも大きな被害を受け、中断を余儀なくされた時期もありましたが、今年に入って再びご協力いただけるようになり、7回の提供をいただきました。

参加者からは「1歳の子どももパクパク食べました」「甘くてジュシーで、噛むほど味が出てまた食べたい」「やわらかくてご飯にとても合う」「塩味がやみつきに」「うまい、うまい、お肉うまい」といった感想がたくさん寄せられています。大人にも子どもにもSPFポークのおいしさが十分伝わっているようです。SPFポークの普及にもつながればと思います。

現在ご協力いただいている認定農場グループは会の通りです(順不同)。

今後とも引き続きご協力のほど、お願い申し上げます。

(株)林商店肉豚出荷組合(6農場、東庄町)、(有)下山農場(旭市)、JAかとり東庄SPF豚研究会(13農場、東庄町)、(有)菅井物産(2農場、旭市)



トピックス

2

神戸でICoMST 2022(国際食肉科学技術会議)が開催されます

2022年8月21日～25日、兵庫県神戸市・神戸国際会議場において第68回国際食肉科学技術会議(International Congress of Meat Science and Technology)が開催されます。

この会議は1955年に設立されたヨーロッパ食肉研究者会議に端を発する伝統ある国際会議で、現在では世界約40か国から400人の研究者と技術者が一堂に会し毎年開催される重要な学術集会です。日本での開催は23年振り、2度目となります。

今回協会はこの会議の後援団体となっております。

詳細は日本食肉研究会ICoMST2022組織委員会のホームページ(<https://jmeatsci.org/events/icomst2022-page>)をご参照ください。



協会からのお知らせ

SPFポークリーフレット最新版が完成、英語版も制作しました

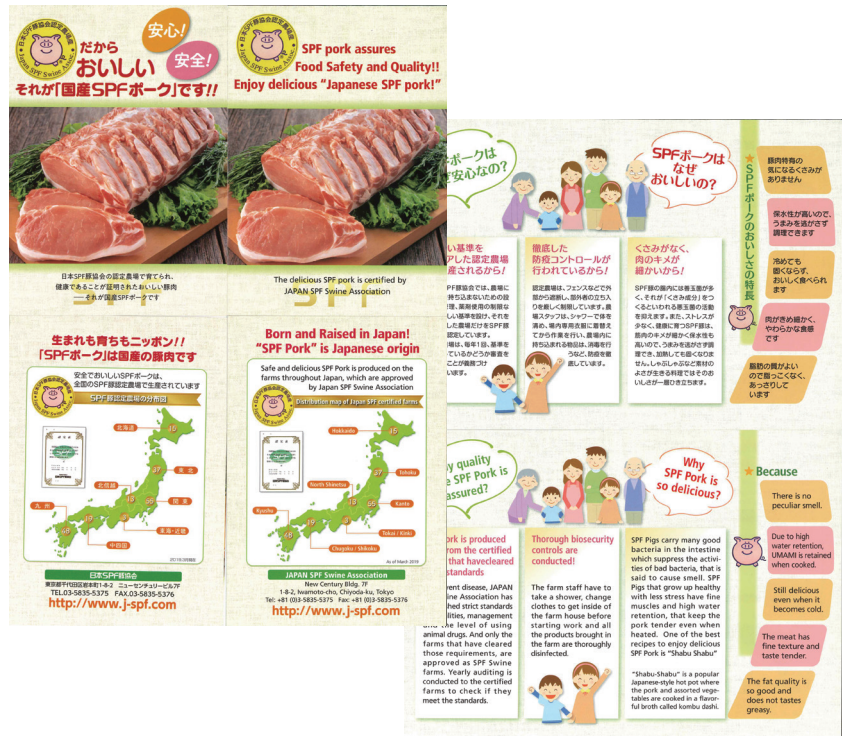
長らくお待たせしておりましたが、この度協会認定農場産SPFポークリーフレット（A6判、4ページ）のリニューアル版が完成いたしました。遅くなって申し訳ありませんでした。また、かねてより会員の皆さまからご要望のあった英語版を合わせて作成いたしました。会員、認定農場産SPFポークを販売している小売店等、関係者には無料でお送りしております。SPFポークの販促資材としてぜひご活用ください。ご希望の方は下記までご連絡ください。

●日本SPF豚協会事務局●

TEL.03-5835-5375

FAX.03-5835-5376

e-mail:j.spf.a@nifty.com



理事会を開催しました

3月27日（金）、協会事務所において令和元年度の理事会を開催いたしました。新型コロナウイルス感染リスクを鑑み、遠方の理事には委任状による出席をお願いし、ピラミッド理事を中心に、6月の定時総会に諮る議事等について協議いたしました。会議後の懇親会も中止といたしました。理事の皆さまには大変ご迷惑をおかけいたしました。お詫び申し上げます。

代議員会を6月に開催します

今年度の代議員会（第16期定時社員総会）は6月17日（水）、東京都千代田区のKKRホテル東京にて開催の予定です。事業報告、決算報告、事業計画等ご審議いただきます。なお、今年度は代議員の改選時となります（任期5年）。定められた選出方法に基づき、ピラミッドを通じて就任をお願いしております。内諾をいただいたのち、改めて就任依頼文書をお送りいたします。総会開催に際してはご案内をお送りするとともに、議案書をお送りし事前にご検討いただけます。また、総会の内容については、議事録および議案を全会員に送付するとともに、協会だよりにも要旨を掲

載いたします。皆さまのご協力をお願いいたします。

理事の交代

組織内人事異動に伴い、ホクレンピラミッドの理事が小師聡氏より金内一浩氏に交代いたしました。同じく吉見隆治理事（㈱ファームテック、宮崎県）が退任、後任に松本伸一氏が就任いたしました。

連載の休載と終了のお知らせ

現在掲載中の「豚のウイルス病」（4ページ）は都合により休載します。また、好評いただいております連載「種豚の能力を最大限発揮させるための飼養管理、栄養管理のポイント」（5ページ、執筆者：中部飼料㈱石川靖之氏）は前号にて終了となりました。長い間ありがとうございました。

日本SPF豚研究会が7月に開催されます

日本SPF豚研究会集会在が7月10日（金）午後、東京都文京区の東京大学構内・山上会館にて開催される予定です。詳細は改めてご案内いたします。

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPFポークの 梅肉白和え

●レシピ提供・白石裏路地 和顔 Jr. ニジヒコ
料理長 高木達也 (北海道札幌市)

今回は豚肉とお豆腐、しかも和食という珍しい
組合せです。白和えというと手間がかかる気が
しますが、ホイッパー等で混ぜれば手軽かも。
豚肉とお豆腐の白に梅肉の赤が映えて見た目も
すっきりです。ぜひお試しください。

●材料 ● (2人前)

- ・ SPFポークももスライス 150 g
- ・ 絹豆腐 1/2 個
- ・ あたり胡麻 大さじ 1
- ・ 上白糖 大さじ 1
- ・ 薄口醤油 大さじ 1/2
- ・ みりん 大さじ 1/2
- ・ 梅干し刻み 2 個
- ・ 昆布 3 g
- ・ 大葉千切り 1 枚
- ・ 水 1ℓ

●つくり方 ●

- ① 鍋に水と昆布を入れて火にかけます。
- ② 絹豆腐、あたり胡麻、上白糖、薄口醤油、みりんをボウルに併せてホイッパー等で混ぜ合わせます。
- ③ 鍋の水が沸騰したら火を止め、豚スライスを入れ湯引きにします。
- ④ ③に②を上からかけ、梅肉、大葉の千切り、①で使った昆布の千切りを盛り付けます。

★高木シェフからのアドバイス

豚スライスは茹ですぎると固くなるので、全体が白っぽくなったら素早く水にとります。

豆腐はよく混ぜ合わせましょう。

認定情報

●2020年3月認定農場 ※新型コロナウイルス感染リスク低減のため、認定員委員長一任とし、委員長、副委員長および事務局のみで開催

(有効期間：2020年3月6日から2021年3月末日まで)

秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、全農畜産サービス(株)秋田大仙SPF豚センター、(株)シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、(株)シムコ岩出山事業所、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、同実験動物豚舎、群馬県・ピッグファームゴカン、(有)長谷井畜産、千葉県・(株)シムコ館山事業所、(株)スターピッグファーム、鈴木治彦養豚、飯田養豚、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)鍋木ピッグファーム、宝理養豚繁殖農場、同

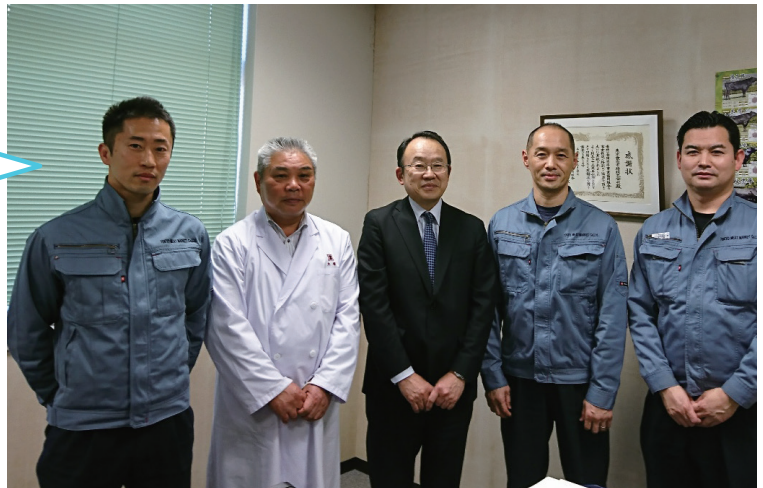
肥育農場、長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、愛知県・(株)知多ピッグ前山農場、同美浜農場、島根県・奥出雲ファーム(有)、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、(株)佐々牧場、同第二農場、宮崎県・(株)ナンチクファーム守山細田農場、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、同阿久根農場(以上36農場)

※次回認定委員会は2020年6月4日(木)の予定



東京食肉市場(株)
(東京都港区)

全国の食肉流通価格の
指標を担う中核市場
認定SPF農場産豚肉は高い評価



東京食肉市場(株)事務所にて。木村敬専務理事(中央)、大塚勇常務理事(左から2人目)と小動物事業部の皆さん。

JR品川駅港南口付近は、2003年東海道新幹線品川駅開業に伴い整備され、高層ビルが立ち並ぶオフィス街に様変わり。そこから徒歩3分という絶好のロケーションに東京食肉市場(株)はあります。

設立は1966年、今年で54年目を迎えます。資本金は6億円、うち半分の3億円が東京都の出資です。従業員は100名。新幹線開業1年前にセンタービルが完成、最新の衛生対策を兼ね備えた、首都東京の食肉安定供給の拠点ともいえます。全国で最大の取り扱い量を誇ります。

全量セリ上場の同社、と畜場を取り巻く厳しい環境下であっても努力を重ね現状維持を続けています。豚肉のプロフェッショナル揃いの小動物事業部は、抜群のチームワークで生産者を支えています。

豚では上場のうち約3割~4割を協会認定農場産が占めているそうです。同社に出荷している認定農場は、(有)ケイアイファウム(岩手県)、(有)胆沢養豚(岩手県)、(株)林商店肉豚出荷組合(千葉県)、(有)常陸牧場(茨城県)、(株)ユキザワ雪沢農場(秋田県)、鎗木ピッグファーム(千葉県)、米川養豚場(茨城県)、(株)しまぎき牧場蔵王高原牧場(宮城県)など。いずれも高い評価

を受け、相場を牽引しているとのこと。

創立50周年を機にスタートした同社主催の共励会でも常陸牧場やケイアイファウムがそれぞれ最優秀賞を獲得するなど、さすがの存在感を示しています。

協会の賛助会員は3年前から。協会理事である(株)林商店の林寛康社長のご紹介です。昨年の協会創立50周年記念事業においても、多大なるご協賛をいただきました。

SPF豚について木村敬専務理事に伺ったところ、「今出荷していただいている農場は、いずれもレベルが高くきちんとしている、いいイメージしかないですが、SPFという言葉が末端まで浸透しているかというところでもない。もっとアピールが必要ではないでしょうか」と、協会の持つ課題をご指摘いただきました。

今後については「国産で生き残るためには品質、競争力、差別化が不可欠。ニーズに合う豚の販売数を増やしていきたい。事業の多角化も視野に入れつつ、東京出荷が全国の指標であり続けるように努力していきたい」と抱負を語っていただきました。引き続き生産者の支えとなっただけ、畜産業界の発展に貢献いただけたらと思います。(編集部)

編集後記

豚熱はワクチンの効果が出ているのでしょうか。沖縄ではまだ発生しているようですが、翻って、年初に発生した人の新型コロナウイルス肺炎は瞬く間に全世界に拡大、オーバーシュートしている国もあります。感染症の脅威は3~4年前から指摘されていました。解明されていないことの多い今回のウィルス、対策は基本が大切と専門家の弁。これはSPF豚農場への出入りでも同じことです。まずは管理者の健康維持、寝起きの口ゆすぎと手洗い、外出からの帰宅直後の手洗いというが、十分な睡眠の確保!!農場への病原菌の持ち込み、持ち出しを最小限に抑制することを肝に銘じましょう。(世)。



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第79号 2020年4月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀